タイトル

武江年表の活字本を用いた計量的考察

抄録

武江年表は斎藤月岑の書いた江戸時代284年間の年表で、正編8巻、続編4巻の全12巻ある。明治以降に出版された武江年表の３つの活字本を利用し、章タイトルの比較を通して年表の正確さを見た。活字本に誤りがある一方、原本の誤りも疑われ、月岑にとって古い年代に多かった。次に、3つの活字本から誤字脱字を補ったテキストを作り、武江年表の基本統計を見た。284年すべての年で記事があり、年間10大ニュース程度の年が多い。1つの記事は30字程度で、時に1,000字を越える長文の記事もあった。記事の内容では開帳、死亡、火事が多く、開帳は時期によって増える。続編は記事の数、頻度も増え、正編と別物といえる。最後に、武江年表に載る数字、暦の月の大小、日月食、人の年齢を調べた。記事の正確さが確認された一方、記事に洩れたものも多くあることが示された。

キーワード

武江年表、斎藤月岑、江戸時代、旧暦

著者

梅村俊彰
toshume@icloud.com

利益相反

利益相反に該当する事項・関係はない。

1　はじめに

武江年表[1,2]は江戸時代に斎藤月岑(文化1(1804)年～明治11(1878)年、以下、月岑)が書いた年表であり、正編8巻、続編4巻の全12巻ある。月岑は江戸の町名主で、名は幸成、号は月岑、「江戸名所図会」「東都歳事記」「声曲類纂」「武江年表」など、多くの著作がある。特に「江戸名所図会」は、祖父の長秋(幸雄、元文2(1737)年～寛政11(1799)年)、父の莞斎(幸孝、安永1(1772)年～文政1(1818)年)と3代に渡って書き継がれ、月岑により完成された。

武江年表は「村漢野嬢の為に、東武繁華の梗概を知らしむるの一助とす」(巻1、提要)ために書かれた。天正18(1590)年～明治6(1873)年の284年間が1年毎に章立てされ、その年のニュース記事が日付順に並ぶ。記事の内容は、その日の天気から、大地震や黒船といった大事件まで、多岐に渡る。「此編に載る所は、中人以下の耳目に触るところにして、地理の沿革或は坊間の風俗、事物の権輿に至るまで、獲るに随て誌す」(巻1、提要)とあり、江戸のできごとを市井の人の分かる範囲で書く。簡潔に事実を述べており、江戸時代を知る資料として重用されている。

正編[1]は、天正18(1590)年～嘉永1(1848)年までの記事を収め、嘉永2(1849)年に出された。月岑が巻頭で「庶幾は大方の君子、遺脱を補ひ誤謬を正し賜らむ事を」(巻1、提要)と広く意見を募ったため、何人もが補足を寄せた。

補訂には、喜多村筠庭や関根只誠のものがある。事実の訂正に留まらず、その時にあった他のニュースも足されて、ほとんど合作のようにも見える。これら補訂を受け、あらためて月岑も正編本文に注釈を入れて、再訂正を行った。

続編は、「前輯八巻を梓行せしより、嘉永以降の風俗世態も見聞に随ひ厥綱要を録しつれど、世営倥偬の際、綜緝浄書の暇なくして年所を経たり」(巻9、附言)とあり、嘉永2(1849)年～明治6(1873)年の記事とそれ以降の附録を収め、明治11(1878)年に完成したが、出版は月岑の死後であった。

武江年表の巻、収録年、出版時期を表1に示す。

表1　武江年表の巻、収録年、出版時期

<table>
<tr><th></th><th>巻</th><th>収録年</th><th>原本</th><th>我書</th><th>増訂</th><th>叢書</th></tr>
<tr><td rowspan="8">正編</td><td>巻1</td><td>天正18(1590)年～　寛永13(1636)年</td><td rowspan="4">正編(前編)
嘉永2
(1849)年
刊</td><td rowspan="8"></td><td rowspan="8">1巻
大正1
(1912)年
刊</td><td rowspan="8">1巻
大正6
(1917)年
刊</td></tr>
<tr><td>巻2</td><td>寛永14(1637)年～　寛文12(1672)年</td></tr>
<tr><td>巻3</td><td>延宝 1(1673)年～　宝永 7(1710)年</td></tr>
<tr><td>巻4</td><td>正徳 1(1711)年～　寛保 3(1743)年</td></tr>
<tr><td>巻5</td><td>延享 1(1744)年～　明和 6(1769)年</td><td rowspan="4">正編(後編)
嘉永3
(1850)年
刊</td></tr>
<tr><td>巻6</td><td>明和 7(1770)年～　天明 8(1788)年</td></tr>
<tr><td>巻7</td><td>寛政 1(1789)年～　文化14(1817)年</td></tr>
<tr><td>巻8</td><td>文政 1(1818)年～　嘉永 1(1848)年</td></tr>
<tr><td rowspan="5">続編</td><td>巻9</td><td>嘉永 2(1849)年～　安政 2(1855)年</td><td rowspan="5">続編
明治11
(1878)年
完成</td><td rowspan="5">上下巻
明治15
(1882)年
刊</td></tr>
<tr><td>巻10</td><td>安政 3(1856)年～　文久 1(1861)年</td></tr>
<tr><td>巻11</td><td>文久 2(1862)年～　慶応 3(1867)年</td></tr>
<tr><td>巻12</td><td>慶応 4(1868)年～　明治 6(1873)年</td></tr>
<tr><td>(附録</td><td>明治 7(1874)年～明治10(1877)年)</td></tr>
</table>

武江年表の活字本は明治以降に出された。

「武江年表　続編」[2](以下、我書)は、甫喜山景雄により我自刊我書として明治15(1882)年に出版された。「此編は翁が遺墨の家に蔵するものなり、嗣子喜之助氏と謀りて其志を成すと云爾」(下巻、後書き)とあり、続編の出版はこれが最初である。体裁では、記事が月ごとに段落分けされている。

「武江年表　増訂」[3](以下、増訂)は、朝倉無声の増訂を加え、巻1～巻11と補訂を収めて大正1(1912)年に出された。「然れども月岑翁一家の見なれば、往々誤記脱漏あるを免れず。既に喜多村筠庭翁の武江年表補正、写本、関根只誠翁の武江年表書入写本、等あり。今以上の二書によりて補正すると共に、更に諸書を渉獵して増訂を加へたり。」(緒言)とあり、補訂は本文中に字下げして入れられる。惜しむらくは、江戸時代でないとして、巻12を収録していない。

「江戸叢書　巻の十二」[4](以下、叢書)は大正6(1917)年に江戸叢書シリーズの1冊として出され、巻1～巻12と補訂を収めている。全12巻を活字で収めた最初の本である。「而して本叢書に収むる所は、後日補正略成りし後、月岑自ら正続両編の誤謬を訂正せる珍書に依り、書中此等の点は月岑補正、補正略何々頁参照と傍書し、以て読者の参看に便したり」(解題)とある。しかし、続編の訂正はありえず、他にも巻頭の解題で年数を誤るなど、誤字脱字が目立つ。体裁では、記事は箇条書きでなく続けて書かれる。補訂は本文と別に、後ろにまとめて付けられる。

尚、叢書では増訂の存在に触れていないが、叢書も増訂も月岑の再訂正部分まで同じであり、原本が同じか、一方が他方を参照したのか、関係は不明である。一方、続編は、叢書も増訂も我書を元にしたはずであり、我書の誤りがどちらにも共通すると思われる。

その後、昭和になって、さらに補訂本が出されている。

「増訂　武江年表」[5]は金子光晴の校訂を入れ、平凡社から昭和43(1968)年に東洋文庫として出された。「本書は、国書刊行会叢書所収の『増訂武江年表』(大正元年刊)を底本とし、校訂にあたり、江戸叢書第十二巻(大正六年刊)所収の『武江年表』、及び喜多村信節(筠庭)手録『武江年表補正略』とを対照した。」(上巻、凡例)とあり、増訂と叢書に基づいている。

「定本　武江年表」[6]は今井金吾の校訂により、平成15(2003)年に筑摩書房から出された。「そこで今回は、校訂者としての私の所蔵する当時の『武江年表』正編(二冊本)と明治十五年(一八八二)刊『武江年表』続編を底本として採用、また国立国会図書館蔵の喜多村筠庭著『武江年表補正略』、『増訂武江年表』中に記載の関根只誠・朝倉無声による補訂記事を、原本の『武江年表』の該当記事中に挿入。さらに各種年表を参考として私の選んだ補訂を加え、一層の正確を期することとした。」(上巻、はじめに)とあり、原本、補訂本を総合して、より完全を目指している。

今回、国立国会図書館デジタルコレクションで見られる3つの活字本、我書、増訂、叢書を利用し、武江年表に現われる数字を比較して、活字本や月岑の正確さを議論したいと考えた。3つの活字本、我書、増訂、叢書の月岑の本文は、もとより同じ文章であるが、所々、誤字脱字など相違がある。その内、章タイトルに注目し、比較を行う。次に、3つの活字本から相互に誤字脱字を補い、月岑部分のテキストを作る(以下、月岑テキスト)。月岑テキストを用いて、武江年表の基本統計を見る。最後に、月岑テキストで、天文現象や人の年齢の数字を取り上げ、議論する。

2　対象および方法

2.1　対象

対象は、武江年表の3つの活字本の月岑による本文と章タイトルであり、他の補訂などは含まない。また、3つの活字本の本文を総合して作った月岑テキストを用いる。月岑テキストは新字とし、句点を適宜補い、割り注は括弧にあらためた。記事のかなづかい、表記揺れは原文のままとした。

武江年表は年毎に章立てされ、記事が箇条書きで日付順に並ぶ。一つの記事は○印に始まり、日付と内容が書かれる。正編では各元号の終りに年間記事の章が設けられ、その元号の間を通して起こった、もう少し長いスパンの記事が集められる。また続編の巻12には附録として、明治7(1874)年～明治10(1877)年のできごとが、やはり日付のない記事として追加される。まれに活字本によって独立した記事か異なることがあるが、月岑テキストでは文意によりいずれか定めた。

2.2　方法

武江年表は284年間に284個の章タイトルがある。章タイトルには元号、年、干支、閏月、改元日の情報が含まれ、これら要素を3つの活字本で比較した。明治以前、元号は度々変更され、連続した年を数えるには干支が便利であった。また、天正18(1590)年～明治5(1872)年の283年間は旧暦が使われていた[7,8]。旧暦は太陰太陽暦であり、月の周期に基づく。月の満ち欠けの周期は約29.5日であるため、旧暦の1ヶ月の日数は30日か29日いずれかとなる。それぞれ大の月、小の月と呼ばれ、並びは一定しない。12ヶ月で365日に満たないため、2～3年に1度、閏月が入るが、どの月に入るか一定しない。そのため、旧暦での生活はすべて前年に出される暦に依っていた。章タイトルの要素はいずれも年表の基礎であり、正確さが求められる。

次に、3つの活字本から作った月岑テキストを利用して、武江年表の基本統計を見る。記事数として、独立した記事を数える。ただし、正編の年間記事と続編巻12の附録の記事は年の記載がなく、年で計数する時はこれらを除いた。巻で計数する時は、これら含めすべての記事を用いた。文字数として、記事の文字数を数える。ただし、句読点、括弧、記号類、ふりがなは除き、「廿、卅」はそれぞれ「二十、三十」と2字と数えた。記事の日付は年月日できるだけ詳細まで用いた。複数の日付や期間を含む記事は、内容に沿った最初の日付を採った。続編の記事は月ごとに段落分けされており、すべての記事が月まで確定したものとした。記事中には他に、季節や月の上下旬、朝夕、時刻など、時を示す情報を含むことがあるが、日付以外は用いない。日付間隔では、日まで記載のある記事を抽出し、日付順に並び替えて、その日にちの間隔を見た。分類は、記事を内容に沿って分けた。1つの記事は1つの分類に属し、重複しないものとした。分類は恣意的であるが、開帳、死亡、火事の3つは比較的基準が明確であり、以下の通りとした。「開帳」は、寺社の開帳や開扉のニュースである。ただし、寺社の開創、神社の祭礼等を除く。「死亡」は、主に有名人の訃報である。ただし、事件、災害による大勢の死亡を除く。「火事」は、火事が起きたニュースである。ただし、火消しや火除地に関するものを除く。

月岑テキストを用いて、武江年表の数字を検討した。月の大小に言及のある記事を抽出

し、暦と照らし合わせた。日月食に言及した記事を抽出し、実際の日月食と確認した。日月食は天文現象であり、過去に起きた日付を特定できる[10]。尚、旧暦では、日食は新月、1日前後、月食は満月、15日前後に起こる。記事に登場するすべての年齢の数字を抽出し、生者と死亡に分けて調べた。年間記事はその元号の末年のものとし、「何十歳余」のような記載は1の位を切捨て、データを最大限利用した。

本論文で扱う日付はすべて旧暦である。括弧書きで西暦の年を付けたが、本来、西暦は太陽暦であり、太陽大陰暦である旧暦と1ヶ月ほどのずれがある。そのため、旧暦の1つの年は、日によって別の西暦の年に当たる。本論文では煩雑を避けるため、旧暦の年にもっとも重なる西暦の年を1対1で当てて示した。

3　結果

3.1　3つの活字本の比較

章タイトルに含まれる元号、年の誤りは叢書に3個あり、「元和年(元和八年)」「安永九月(安永九年)」「享保三年(享和三年)」であった。括弧内に正しいものを示した。

284年間の284個の干支のうち、誤りは叢書に10個、増訂に1個あり、すべて正編であった。干支の誤りを表2に示す。

表2　3つの活字本の章タイトルの干支の誤り

巻	年	正	叢書	増訂
巻1	慶長 6(1601)年	辛丑	辛巳	辛丑
巻1	慶長 7(1602)年	壬寅	壬辰	壬辰
巻1	慶長18(1613)年	癸丑	癸巳	癸丑
巻1	寛永 2(1625)年	乙丑	乙巳	乙丑
巻2	寛永14(1637)年	丁丑	丁巳	丁丑
巻2	寛文 1(1661)年	辛丑	辛巳	辛丑
巻3	延宝 1(1673)年	癸丑	癸巳	癸丑
巻3	貞享 2(1685)年	乙丑	乙	乙丑
巻7	享和 3(1803)年	癸亥	癸未	癸亥
巻8	文政 3(1820)年	庚辰	寅辰	庚辰

284年間に閏月のある年は105回ある。誤りは増訂、叢書ともに3個同じであり、すべて正編であった。閏月の誤りを表3に示す。

表3　3つの活字本の章タイトルの閏月の誤り

巻	年	正	叢書・増訂
巻4	正徳3(1713)年	閏5月	九月閏
巻6	安永2(1773)年	閏3月	二月閏
巻6	安永4(1775)年	閏12月	十一月閏

武江年表の284年間で改元は38回ある。誤りは叢書23回、増訂23回、我書6回であり、

明暦元(1655)年だけ増訂が誤っていた。3つの活字本すべての改元日の記載を表4に示す。また参考として、町触日を併せて示した[9]。誤りの日付はほとんどが町触日であった。

表4　3つの活字本の章タイトルの改元日の誤り

巻	年	正	叢書	増訂	我書	町触日
巻1	文禄1(1592)年	12月 8日	12月 8日	12月 8日		
巻1	慶長1(1596)年	10月27日	12月27日	12月27日		
巻1	元和1(1615)年	7月13日	7月13日	7月13日		
巻1	寛永1(1624)年	2月30日	2月30日	2月30日		
巻2	正保1(1644)年	12月16日	12月16日	12月16日		
巻2	慶安1(1648)年	2月15日	2月15日	2月15日		2月26日
巻2	承応1(1652)年	9月18日	9月18日	9月18日		10月 8日
巻2	明暦1(1655)年	4月13日	4月13日	4月29日		4月29日
巻2	万治1(1658)年	7月23日	7月23日	7月23日		7月25日
巻2	寛文1(1661)年	4月25日	4月25日	4月25日		5月 5日
巻3	延宝1(1673)年	9月21日	9月21日	9月21日		9月29日
巻3	天和1(1681)年	9月29日	9月25日	9月25日		10月 9日
巻3	貞享1(1684)年	2月21日	2月21日	2月21日		2月28日
巻3	元禄1(1688)年	9月30日	9月30日	9月30日		10月 3日
巻3	宝永1(1704)年	3月13日	3月30日	3月30日		3月30日
巻4	正徳1(1711)年	4月25日	5月 7日	5月 7日		5月 1日
巻4	享保1(1716)年	6月22日	7月 1日	7月 1日		7月 1日
巻4	元文1(1736)年	4月28日	5月 7日	5月 7日		5月 7日
巻4	寛保1(1741)年	2月27日	3月 3日	3月 3日		3月 3日
巻5	延享1(1744)年	2月21日	2月18日	2月18日		2月29日
巻5	寛延1(1748)年	7月12日	7月18日	7月18日		7月18日
巻5	宝暦1(1751)年	10月27日	11月 3日	11月 3日		11月 3日
巻5	明和1(1764)年	6月 2日	6月13日	6月13日		6月13日
巻6	安永1(1772)年	11月16日	11月25日	11月25日		11月25日
巻6	天明1(1781)年	4月 2日	4月13日	4月13日		4月13日
巻7	寛政1(1789)年	1月25日	1月25日	1月25日		2月 3日
巻7	享和1(1801)年	2月 5日	2月 5日	2月 5日		2月13日
巻7	文化1(1804)年	2月11日	2月19日	2月19日		2月19日
巻8	文政1(1818)年	4月22日	4月22日	4月22日		5月 4日
巻8	天保1(1830)年	12月10日	12月16日	12月16日		12月16日
巻8	弘化1(1844)年	12月 2日	12月13日	12月13日		12月13日
巻8	嘉永1(1848)年	2月28日	2月16日	2月16日		3月15日
巻9	安政1(1854)年	11月27日	12月 5日	12月 5日	12月 5日	12月 5日
巻10	万延1(1860)年	3月18日	閏3月 1日	閏3月 1日	閏3月 1日	閏3月 1日
巻10	文久1(1861)年	2月19日	2月28日	2月28日	2月28日	2月28日
巻11	元治1(1864)年	2月20日	3月 1日	3月 1日	3月 1日	2月20日
巻11	慶応1(1865)年	4月 7日	4月18日	4月18日	4月18日	4月18日
巻12	明治1(1868)年	9月 8日	9月16日		9月16日	

3.2　武江年表の基本統計

武江年表全12巻にある記事の数は5,407件、文字数は263,809字であった。各巻の記事数と文字数を表に示す。

表5　巻の記事数と文字数

巻	年数	記事数	文字数
巻1	47年	252件	16,015字
巻2	36年	334件	20,420字
巻3	38年	426件	21,616字
巻4	33年	413件	15,793字
巻5	26年	570件	18,795字
巻6	19年	524件	21,139字
巻7	29年	627件	25,142字
巻8	31年	595件	26,053字
巻9	7年	381件	24,026字
巻10	6年	366件	22,309字
巻11	6年	349件	20,512字
巻12	6年	570件	31,989字
(附録	4年)		
計	284年	5,407件	263,809字

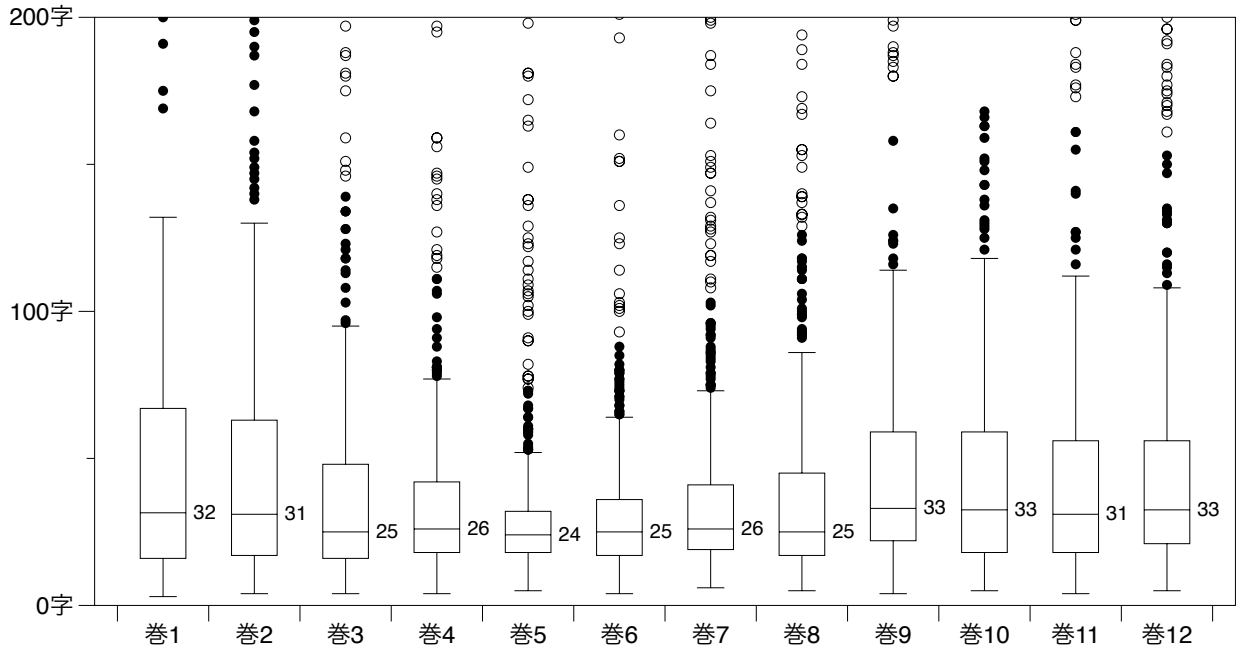
記事の文字数の中央値は27字であった。最小は3字で、寛永4(1627)年の「大地震」、最大は1,960字で、安政2(1855)年の大地震の記事であった。文字数の多かった記事、上位10位までを表6に示す。ただし、年間記事と附録の記事は除いた。

表6　長文記事、上位10件

順位	文字数	巻	年	月日	記事の内容
1	1,960字	巻9	安政2(1855)年	10月2日	大地震
2	1,276字	巻10	安政5(1858)年	7月	コレラ流行
3	1,211字	巻1	慶長8(1603)年		江戸町割、日本橋
4	1,165字	巻11	慶応2(1866)年	5月28日	打壊し
5	1,023字	巻10	安政3(1856)年	8月23日	大嵐、洪水
6	1,012字	巻10	安政6(1859)年	2月21日	大火
7	985字	巻11	文久2(1862)年	6月	麻疹流行
8	916字	巻6	天明3(1783)年	7月6日	浅間山噴火
9	873字	巻9	嘉永6(1853)年	12月	黒船の後の出版ラッシュ
10	871字	巻11	慶応2(1866)年	8月	大道芸、渡米

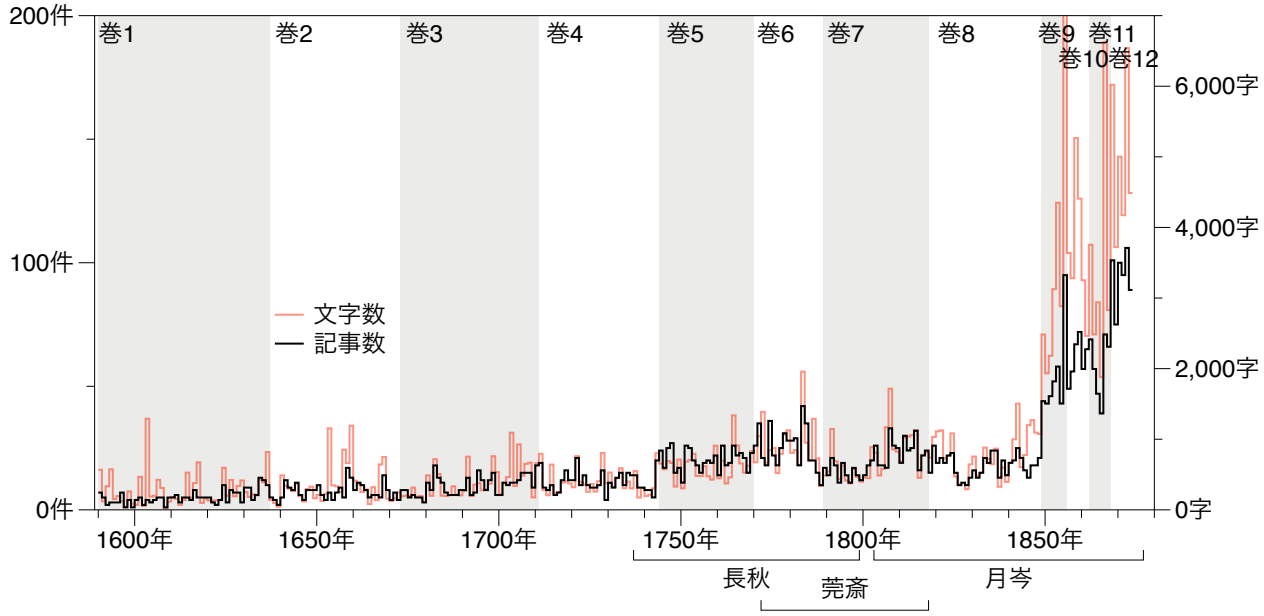
巻ごとの記事の文字数の分布を箱ひげ図にして図1に示す。1,000字を越える記事もあるが、分布の大略を見るため、グラフは200字までの範囲を示した。

図1　巻ごとの記事の文字数分布



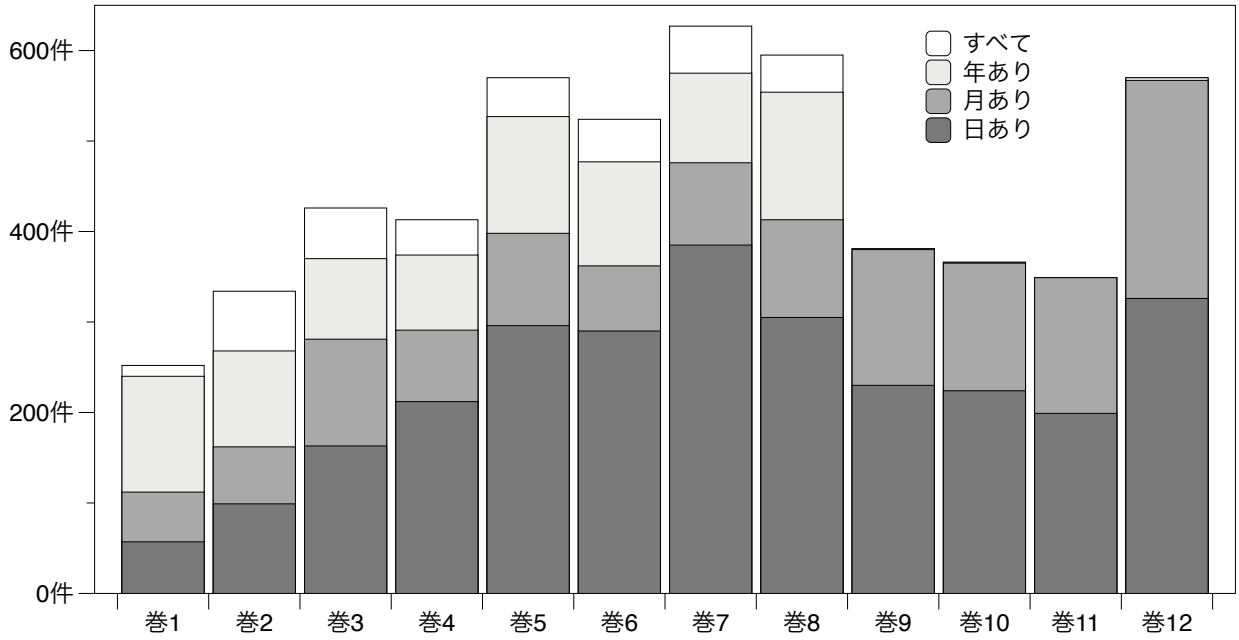
年間の記事数の中央値は13件であった。最小は年間1件で、慶長2(1597)年、慶長4(1599)年、慶長13(1608)年、最大は年間106件で、明治5(1872)年であった。年間の記事数と文字数の推移を図2に示す。年代を巻で色分けし、祖父の長秋、父の莞斎、月岑の生存期間を重ねて示した。

図2　年間の記事数、文字数の推移



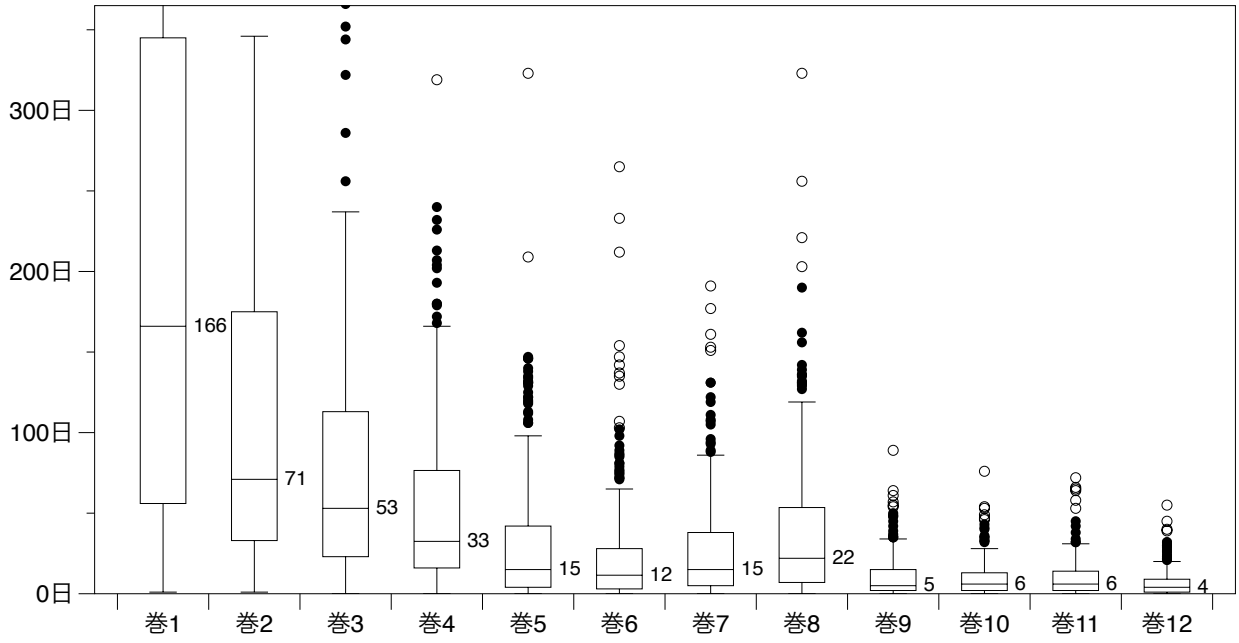
記事の日付では、年のある記事は5,051件(93.4%)、月のある記事は4,156件(76.9%)、日のある記事は2,786件(51.5%)であった。巻ごとの内訳を図3に示す。

図3　巻の記事数と年月日の内訳



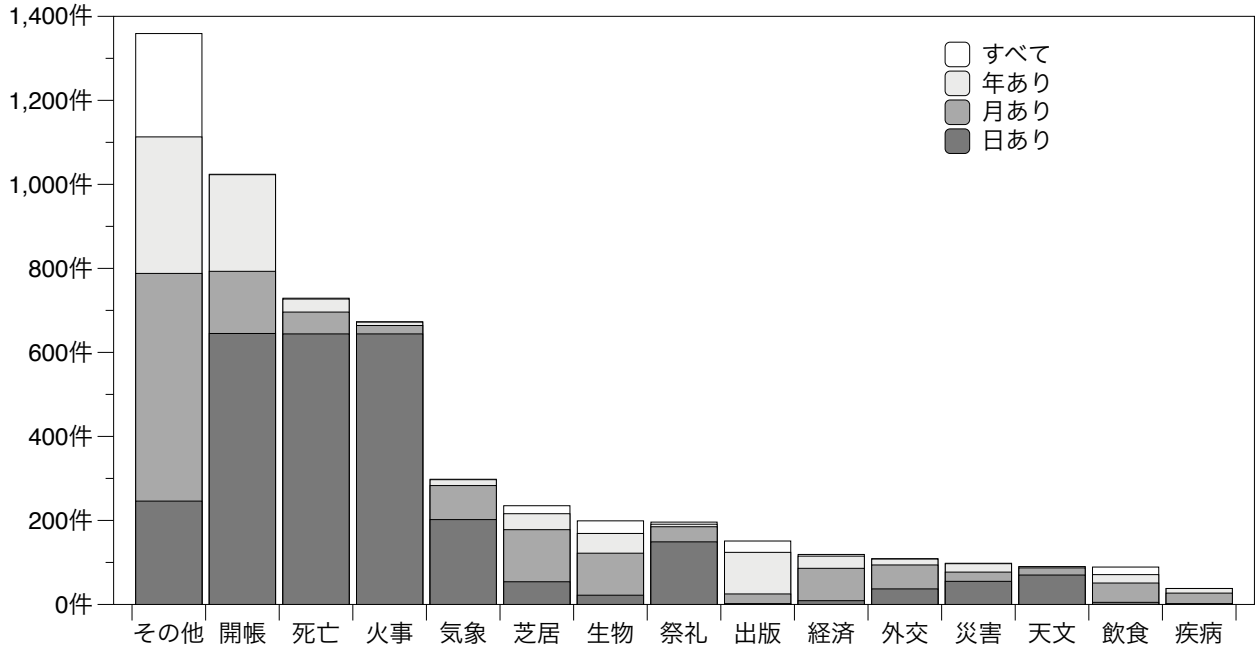
日まで記載のある記事について、日付間隔の分布を箱ひげ図にして図4に示す。縦軸の日数は365日まで示した。巻1で半年近く空く一方、巻5で半月程度、続編の巻9からほぼ毎週に近い頻度であった。

図4　巻ごとの記事の日付間隔の分布



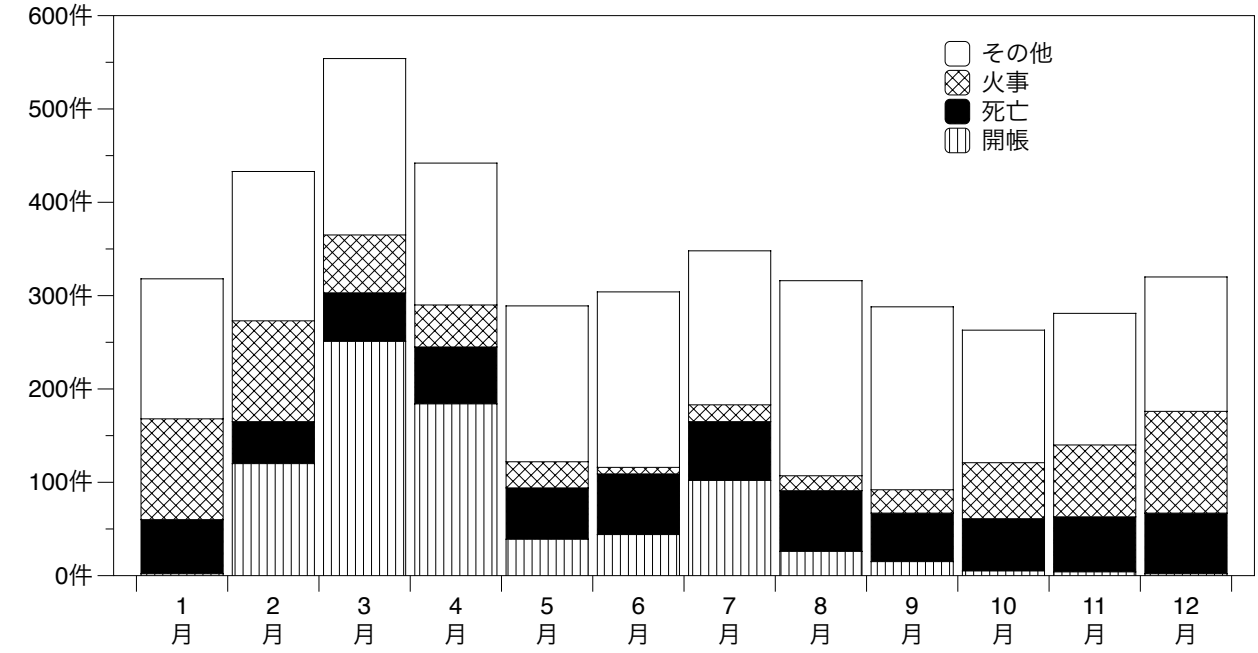
記事の分類の結果、開帳1,024件(18.9%)、死亡729件(13.5%)、火事673件(12.4%)であり、3つの分類で半分近い割合を占めていた。記事の分類と年月日の内訳を図5に示す。分類にあてはまらない「その他」が1,359件(25.1%)あり、町割や事物の由来等の記事などがあった。

図5　記事の分類と年月日の内訳



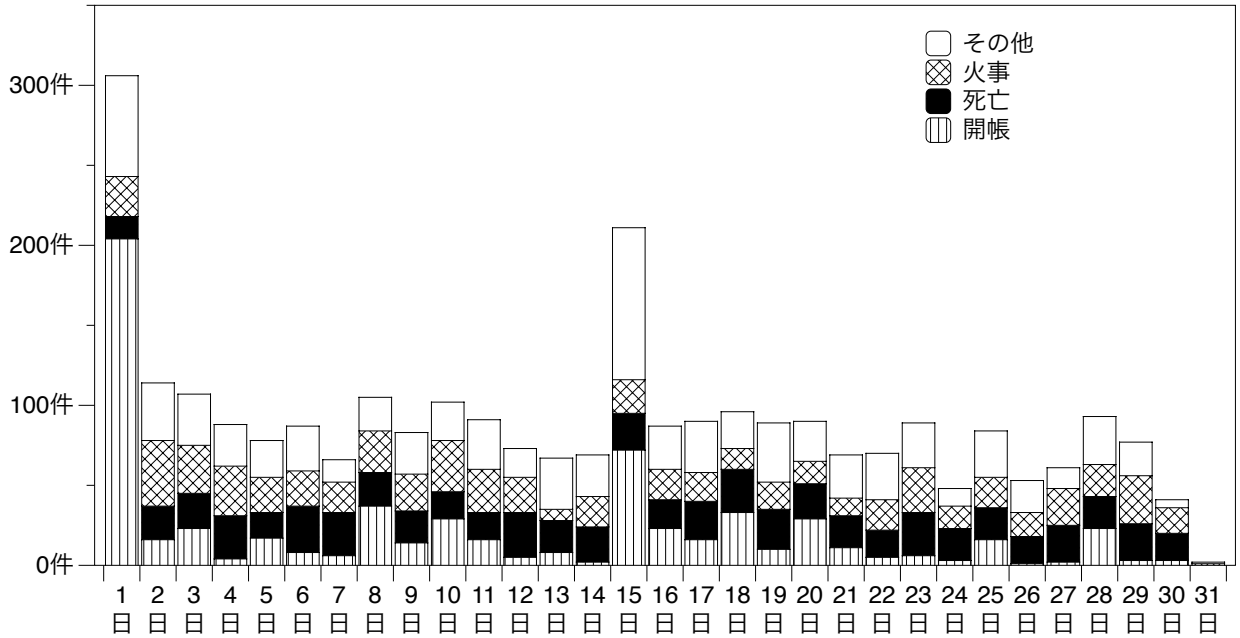
月の記載のある記事4,156件について、その月の記事数と分類の内訳を図6に示した。閏月の記事はその前月に合算した。3月の記事数が他の倍近くあり、ほぼ開帳による。

図6　記事の月と分類の内訳



日の記載のある記事2,786件について、その日にちの記事数と分類の内訳を図7に示した。朔日と15日の記事が多く、開帳による。31日は新暦にしかなく、明治6(1873)年だけである。

図7　記事の日にちと分類の内訳



3.3　武江年表の数字の検証

月の大小に関する記事は14件あった。14件の記事と実際の大小を表7に示した。誤りは3件、すべて正編にあり、月末の日にちの間違いであった。

表7　大小の記事の正誤

巻	年	月	記事	正誤	実際の大小
巻3	元禄10(1697)年		○五元集拾遺、大小の吟　大庭をしろくはく霜師走かな其角	正	1小2大閏2小3小4大5小6大7小8大9大10小11大12大
巻4	享保11(1726)年	6月	○六月卅日、俳人水間沾徳卒(六十二才、号合歓堂、浅草誓願寺に葬)	誤	1大2小3大4小5大6小7小8大9小10大11小12大
巻4	享保13(1728)年	8月	○八月卅日夜より九月二日三日、北大風甚雨にして洪水溢れ、昌平橋、和泉橋、新し橋、柳橋、二日の夕方流落る、三日朝両国橋中程三十六間切流れ、新大橋西の方四十二間程切る、永代橋は普請の中にて、古橋杭流る、下谷浅草の内低き所は軒端水にひたる、小石川龍慶橋其外、小橋流れ、目白山崩れて、上水の白堀埋る、筋違御門、昌平橋の二橋流損によつて神田祭礼十一月に延る	誤	1大2小3大4大5小6大7小8小9大10小11大12小
巻5	宝暦3(1753)年	1月	○正月四日五日八日大雪、九日十七日十八日雨、廿二日雪、廿四日大雪、卅日雨、二月朔日二日三日五日九日十日十三日十四日雨、十六日地震、十七日雨、十九日大雪、廿日朝まで、廿三日廿八日廿九日卅日雨、三月三日大風雨、暁七時より雷鳴大雹降、六時晴、此春気候如此(大江戸春秋)	正	1大2大3小4大5小6小7大8小9小10大11大12小
巻6	安永4(1775)年	9月	○同日より卅日迄、飯田町世継稲荷天満宮開帳	誤	1大2小3大4小5大6小7大8大9小10大11大12小閏12小
巻6	天明2(1782)年	10月	○十月三十日、俳人馬場存義卒(号有無庵、浅草誓願寺に葬す)	正	1大2大3小4大5小6大7小8大9小10大11小12大
巻8	文政12(1829)年		○今年の大小、元禄十年に同じ、よつて其角が大庭を云々の句を吟じて便利をなしける	正	1小2大3小4大5小6大7小8大9大10小11大12大
巻8	弘化5(1848)年		○今年の大小、章の字を以て暗記す、運筆の順により、縦を小とし、横を大とす、章	正	1小2大3小4小5大6小7大8小9大10大11大12小
巻10	安政3(1856)年	8月	○八月より十月迄、大の月三月続きしにより、古例の通、今月十七日十八日、芝切通金地観世音開帳(坐像にして、宋陳和卿の作なりといふ、此の日詣人へ、求るによつて杓子を与ふ、家にかけて守とし、又旅行の輩懐中して方位の凶を避くるといふ)	正	1大2小3小4大5小6大7小8大9大10大11小12大
巻10	安政6(1859)年				1大2小3大4小5小6大7小8小9大10小11大12大
巻10	安政7(1860)年	1月	○今年の大小、去年に替らず、三月に閏あれど本月に同じく大の月なり、同じ大小二年続きたるも珍らし、松本董斎が戯れに、四七二十八で五ざりま小、と書きたるが、二年の便利をなせり	正	1大2小3大閏3大4小5小6大7小8小9大10小11大12大
巻11	元治1(1864)年	8月	○八月は大の月、三月続し中の月故、十七日十八日、芝金地院観音開帳あり	正	1小2小3大4小5大6小7大8大9大10小11大12小
巻11	慶応1(1865)年	7月	○七月中卅日間、三田台町薬王寺祖師開帳	正	1大2小3小4大5小閏5大6小7大8大9小10大11大12小
巻11	慶応2(1866)年	11月	○今年も大の月三月続の処、十一月は中の月にて、十七日十八日、芝金地院観世音開帳あり	正	1大2小3大4小5小6小7大8大9小10大11大12大
巻11	慶応3(1867)年	11月	○同月十八日、大の月三月続し中の月故、昨日今日、芝金地院観世音開扉、杓子を与ふ	正	1小2大3小4大5小6小7小8大9小10大11大12大

284年間に日本で見られる日食は165回、江戸から見えるものに限っても100回以上あるが、日食に関する記事は9件であった。9件の記事と実際の日食の日時を表8に示す。誤りは1件であり、その前後で実際に起きた日食の日時を合わせて示した。

表8　日食の記事の正誤

巻	年	月日	記事	(およその時刻)	正誤	実際	(新暦)	時刻
巻1	寛永13(1636)年	1月1日	○正月元日、日蝕、		誤	寛永13年7月1日	(1636/08/01)	9:17-14:37
						寛永14年1月1日	(1637/01/26)	10:48-16:47
巻3	元禄5(1692)年	1月1日	○正月元日、未申の時、日蝕(七分半)	(14-16時頃)	正	元禄5年1月1日	(1692/02/17)	10:51-16:02
巻3	元禄14(1701)年	1月1日	○正月元日、卯辰刻、日蝕(八分)	(5-7時頃)	正	元禄14年1月1日	(1701/02/08)	5:16-10:53
巻4	享保4(1719)年	1月1日	○正月元日酉の時、日蝕(二分半)	(18時頃)	正	享保4年1月1日	(1719/02/19)	13:05-18:40
巻5	宝暦13(1763)年	9月1日	○九月朔日、日蝕(九分)暦面に脱せりといふ、		正	宝暦13年9月1日	(1763/10/07)	7:01-12:16
巻5	明和4(1767)年	1月1日	○正月元日未八刻より申刻迄、日蝕(二分半)	(14-16時頃)	正	明和4年1月1日	(1767/01/30)	10:18-15:35
巻6	天明6(1786)年	1月1日	○正月元日丙午にて、午一刻より未一刻迄、日蝕皆既、闇夜の如し、	(12-14時頃)	正	天明6年1月1日	(1786/01/30)	9:17-14:13
巻9	嘉永3(1850)年	1月1日	○正月元日申刻より、日蝕三分半、	(16時頃)	正	嘉永3年1月1日	(1850/02/12)	12:25-18:33
巻9	嘉永5(1852)年	11月1日	○十一月朔日巳刻より、日蝕九分余なり(闇夜にはならず、往来の時、行灯を用ゆる程にはあらず)	(10時頃)	正	嘉永5年11月1日	(1852/12/11)	10:26-14:55

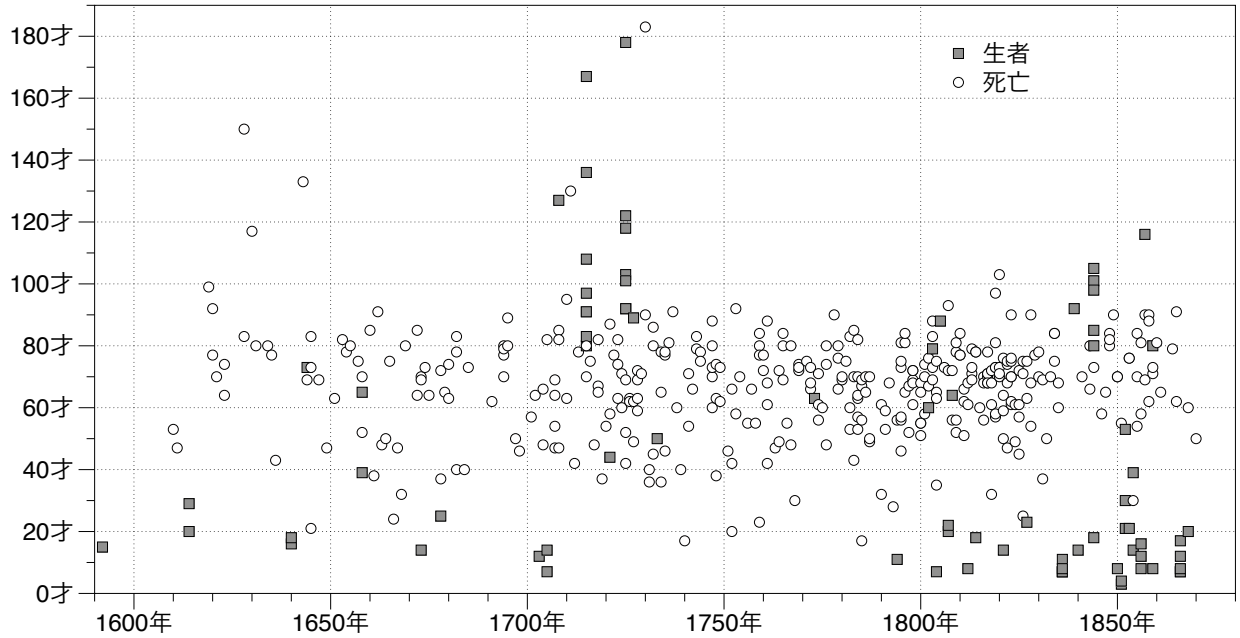
284年間に日本で見られる月食は324回あるが、月食に関する記事は6件であった。6件の記事と実際の日時を表9に示す。誤りは1件であり、その前後で実際に起きた月食の日時を合わせて示した。

表9　月食の記事の正誤

巻	年	月日	記事	(およその時刻)	正誤	実際	(新暦)	時刻
巻5	宝暦4(1754)年	8月15日	○八月十五日夜酉の刻、月蝕(皆既)	(18時頃)	正	宝暦4年8月15日	(1754/10/01)	17:00-20:56 皆既
巻5	宝暦5(1755)年	8月15日	○八月十五日夜酉戌時、月蝕、六分	(18-20時頃)	正	宝暦5年8月15日	(1755/09/20)	18:08-20:59 部分
巻6	天明3(1783)年	8月15日	○八月十五日亥の刻、月蝕、四分半(良夜の宴もこれにてをはりしなるべし)	(22時頃)	誤	天明2年8月15日	(1782/09/21)	22:14-24:21 部分
						天明3年2月17日	(1783/03/19)	04:40-08:22 皆既
						天明4年7月15日	(1784/08/30)	22:25-25:07 部分
巻9	嘉永5(1852)年	5月14日	○同十四日夜九時より八時六分迄、月蝕皆既	(24-26時頃)	正	嘉永5年5月14日	(1852/07/01)	22:37-26:15 皆既
巻9	安政2(1855)年	9月15日	○同十五日夜、月蝕皆既、夕七時七分より六時三分に畢る	(17-18時頃)	正	安政2年9月15日	(1855/10/25)	14:44-18:15 皆既
巻11	慶応2(1866)年	8月16日	○同十六日、月蝕皆既、五時より九時過迄なり	(20-24時頃)	正	慶応2年8月16日	(1866/09/24)	21:19-24:55 皆既

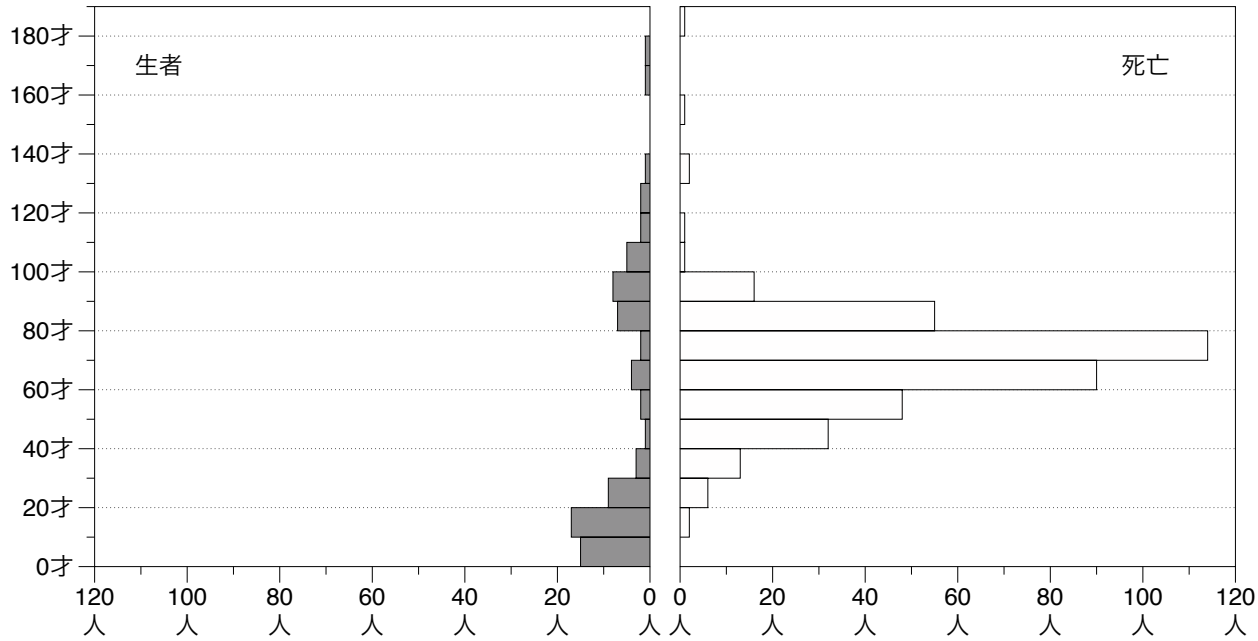
武江年表に現われるすべての年齢を、その記事の年とともに散布図にして図8に示した。生者80人、死亡382人の年齢が見つかった。■が1人の生者の、○が1人の死亡の年齢を示す。生者はその一時点の年齢であり、寿命ではない。

図8　記事の年と年齢の散布図



生者と死亡それぞれの年齢のヒストグラムを図9に示す。生者の年齢の20歳未満と90歳代に山があり、死亡の年齢は70歳代にピークがある。

図9　生者と死亡の年齢分布



4　考察

4.1　3つの活字本の比較

3つの活字本の章タイトルの比較で、元号と年は叢書のみ誤りがあった。しかし増訂は、叢書で「同」としている元号も省略せず、章タイトルを独自に整えており、原本が誤っていないかは不明である。

干支でも叢書の誤りが目立った。江戸時代、干支は時刻、方角、年月日など到るところで用いられ、深く生活に根付いていた。従って、原本は活字本より誤りにくいと考えられる。

閏月は叢書と増訂で全く同じ誤りであった。新暦の閏年は4年に1度だが、旧暦では暦を参照しないと分からない。宝暦8(1758)年の記事に、「○古暦便覧再刻(京師になる、慶長元年より安永五年迄、大小閏月等此書にあり)」(巻5)とあり、月岑も古い暦を認識している。今回の誤りは漢数字の似た誤りであり、転記ミスがありうる。ただ、後の2つの誤り、安永2(1773)年と安永4(1775)年の閏月は、修正宝暦暦による特例があり、月岑の参照した暦では正しかった可能性がある。一方、閏月の誤りで、平年に閏月を入れたり、閏月のある年を平年とするような誤りはない。

改元日は、町触日を記載しているものが多かった。3つの活字本でほぼ同じ誤りであり、原本からと思われる。江戸時代、改元を庶民が知るのは町触による。町触には改元日が別に書かれることもあるが、町触日のみ記載したものも多く、月岑もこれに依ったかもしれない。一方、正しい改元日の年もあり、用いた資料によるのか不明である。

以上、3つの活字本の章タイトルはほぼ正しく、年表の正確さが確かめられた。叢書の誤字脱字が目立つ一方、原本の誤りと見えるものも、月岑の参照した範囲で正しかった可能性がある。

4.2　武江年表の基本統計

武江年表の記事の多くは30字足らずで、非常に簡潔に書かれている。284年すべての年で記事があるが、10大ニュース程度の年も多い。これは正編で顕著であり、続編は収録年数が少ないにも関わらず、年当たりの記事の数は増え、密度が高い。記事の日付間隔で見ると、正編の始めで間隔が広く、月岑にとっても過去に遡るほど資料が少なかった可能性がある。短い記事が多い一方で、しばしば非常な長文の記事が混じる。これらは読み応えがある記事であり、災害の話題が目に付く。続編に多く、月岑の執筆にかける熱意を感じさせる。

記事の内容では、開帳、死亡、火事が多い。これらは当時、庶民の関心を集める話題であったと考えられる。記事の数は実際に起こった回数ではないが、多く起こることは多く記事になるのが自然であり、記事数は一つの目安になると考えられる。月変動では、開帳は3月4月に多い。また、火事の記事は冬季に多く、死亡の記事も冬にやや増えて、季節の影響が見られる。また日変動から、開帳は朔日と15日に多かった。

武江年表として一体に扱われるが、正編と続編は別物に近い。続編は月岑のリアルタイムに過ごした時代であり、記事のペースは月岑の背景を考えさせる。

4.3　武江年表の数字の検証

月の大小の誤りは3件、すべて正編で、月末の日にちの間違いであった。「晦日」を書き換える際に誤りやすいが、月岑にとって遠い過去でもあり、誤りに気付きにくかったかもしれない。一方、続編は月岑が実際に使用していた暦である。当時、三連続する大の月に開帳するような催しもあり、大小に対する関心は高く、誤りは生じにくいと考えられる。一方、しばしば同じ大小の年という記事があるが、実際には283年間のうち200回程は同じ大小を工夫して使うことができるはずであり、すべてが記事になっていない。尚、叢書では、巻7の文化12(1815)年の記事の中で「七月三十一日」と誤っているが、旧暦に

存在しない日にちであり、増訂は「二十一日」である。叢書の誤字脱字の多さを示す一方、新暦が普及した影響も考えられる。

日食の誤りは1件で、正月の日食は翌年の間違いと考えられる。月岑にとって古い記録であり、誤りに気付きにくかった可能性がある。また、大きな日食でも記事になっていない。江戸では、天保10(1839)年8月1日に金環日食があったが、記事には現われない。日食が見られるかは天気に影響され、月岑自身の事情もある。しかし、日食の予報は当時の暦に載っており、月岑が把握していないとは考えにくい。一方、実際にない日食の記事が書かれることはなかった。

月食の誤りは1件で、8月15日の月食は前年の間違いと考えられた。二と三と似た漢数字であり、転記ミスも疑われる。8月の月食の記録が多いのは、中秋の名月のためと考えられるが、その点、嘉永5(1852)年の記事は5月で、かなり遅い時刻の月食を記録している。また、実際に起こった月食でも記事になったものは少ない。月食の観測は天候に左右され、欠ける大きさや見やすい時刻であるかにもよる。ただ、実際にない月食の記事が書かれることはなく、この点も日食と同じである。

年齢の分布では、生者の20歳未満の山は、何かすぐれた技芸や特徴を持つ子供の記事が多く、見せ物や相撲の話題に現われていた。生者の80〜100才の山は、長寿が度々ニュースになることによる。死亡年齢は、現代でも高齢者に当たる年代が多い。また、時代を下るほど死亡年齢が上がるといった傾向は見られない。これは、江戸時代の平均寿命が短命であるイメージとそぐわない[11)]。一因として、記事に載るのは有名人であり、名を上げるだけの人生の期間があったバイアスが考えられる。また、そのような人は衣食住も一般より恵まれた環境にあった可能性がある。ただ、死亡時の年齢や長寿の話題に今日でいう高齢者が散見されることは、長寿や早世に対する感覚が現代とそれほどかけ離れていなかったとも考えられる。一方、120歳以上の極端な長寿が当り前に登場する。そのような寿命は生物学的に存在が疑わしいが、当時そういった意識はなかったことがうかがえる。戸籍制度のない時代に年齢は本人の記憶次第だが、他の暦の正確さに比して、やや意外に思われる。

以上より、書かれた記事は相当に正確である一方、できごとすべてが記録されている訳ではない。記事の取捨選択には月岑の背景を考えさせる。

4.4　武江年表と月岑の人生の時期

月岑は父の死を受け、15歳で家督を継いだ。武江年表では巻7から巻8への切替わりの頃に当たる。実際に月岑が武江年表に取り掛かった時期は不明だが、巻5から記事数の増加が見られることは、江戸名所図会の編集を引き継いで、祖父の代からの資料があったのかもしれない。

天保4(1833)年の記事では、「〇江戸名所図会梓行、(此の書は寛政中、祖父長秋居士の遺稿、先考県麿の校訂にして、郊外に及ぼせるは大かた県麿の編輯なり、半梓に行ひしもの有、又草稿成りて浄書に及ばざりしものあり、先考歿後遺稿を浄書して庸書に委ねしは、おのれが若冠の頃にして、烏焉の誤謬尠からず、今に至りて悔れどもかひなし、杜撰の罪を先考におはせざらんが為、こゝに書きつく)」(巻8)と、自身の若さを振返っている。天保4(1833)年に月岑30歳、一方、巻8を書いたのは最大45歳頃であり、その間の自身の成長を感じていたことになる。

巻8は月岑がリアルタイムに生きた時だが、続編に比べると、まだ記事の量も頻度も控え目で、巻7までと変わらない。いみじくも巻8の後書きで月岑はこう結んでいる、「累歳風雨時に順ひ、百穀豊饒にして都鄙の良賤閑を獲る事多きが故、殊に快楽をなし、東台の春の花、墨水の秋の月は更なり、神祭仏会或は啓龕の場に賽し、春冬二度の相撲に輻湊し、花街に戯れ梨園に遊び、又は市井の囂塵を避け、多摩川に年魚を汲では、樽前に帰路を忘れ、真間に丹楓を賞しては詩を賦し歌を詠じ、斜陽を惜む輩も尠からず、実にこれ昇平の御恩沢にして、造次顛沛忘るまじくこそ」(巻8)。激しい災害の記事も散見される正編が、この結びとなっていることで、江戸時代全体に渡って楽観的で、どこか郷愁を誘うものに感じさせる。

年表としては切れ目なく続いているが、正編と続編では月岑の書き方が変わる。続編は明治以降に出版された。従って、続編の記事は、江戸時代のことを書いていても、所々、近代の視点が透けて見える。文久1(1861)年の記事には、「○今年も、根津、千駄木薮下の辺、菊の造り物多く出来て、日々遊観の人多し、巣鴨、染井の造り菊は前巻にいへる如く、文化九年の秋より始まり、江城の尊衆、日毎に群集してこれを賞しける頃、先考に誘はれて、このわたり見めくらひしも、明治戊寅の年に及びて、はや六十七年の昔となりぬ、夫より後も大かた、年々にこれを造りて、此の里の名物とはなりぬ、然るに造り菊は鄙俗のものとして見ざる人あれど、此の時節丹楓の佳境を繹るの外に花なき頃にして、東京の中央より道を阻る事も遠からざれば、此の辺に徘徊し、団子坂に名を得し河漏麪(そば)に一樽を傾け、遥かの野径を眺望し、或は此の辺の拍戸に酔を催し、衆人と共に連牆の芸花園(うゑきや)に入り、庭中を眺め、菊の花檀、盆種の草木多かるを賞し、一日逍遥して、夕照の斜なるを惜む輩も鮮からず、真にこれ仲秋の一楽事なり」(巻10)とあり、文久1(1861)年の記事から引いて文化9(1812)年の昔を偲び、さらにそれを書く明治11(1878)年の視点に至る。客観的に書かれた年表の中で、珍しく月岑の私生活が伺われる記事である。

明治維新の時、月岑は65歳であり、この激動の時期でも年表の書き振りは変わらず、むしろ、記事の数、文字数は尻上がりに増える。年毎の章立てで記事があるのは巻12の明治6(1873)年までだが、附録には明治7(1874)年〜明治10(1877)年のニュースが詰め込まれている。月岑は明治11(1878)年3月に75歳で亡くなるが、附録の最後に1件、明治10(1877)年5月の日付のある記事があり、月岑の執念を感じさせて武江年表は終わる。

4.5　テキスト公開

作成し分析に用いた月岑テキストを別に公開する。1記事1レコードの表形式のファイルである。全5,407件の記事と、属性として巻や日付、分類も含めた。章タイトルは含まない。元の武江年表にある序文や凡例、また活字本で加えられた前書き後書きなど、記事以外のものは含まない。誤字脱字、分類の誤り等、あれば指摘いただけるとよい。

5　おわりに

武江年表の3つの活字本の比較を、章タイトルを用いて行った。284年のほとんどで正確であった。誤りは叢書で目立つ一方、原本の誤りが疑われるものは、月岑にとって古い時代に多かった。武江年表の特徴として、記事は30字程度と短く、年間10大ニュース程度

の年が多い。記事の内容では開帳、死亡、火事が多く、開帳は時期によって増える。正編と続編で、記事数、文字数に大きく差があった。続編は記事の頻度も増え、正編と別物に近い。最後に、武江年表に載る数字で、暦の月の大小、日月食、人の年齢を調べた。記事の正確さが確認された一方、記事に洩れたものも多くあることが示された。

文献

1) 斎藤月岑(嘉永3(1850)年)『武江年表』(1〜8巻)青藜閣, (国立公文書館デジタルアーカイブ)〈https://www.digital.archives.go.jp/file/1250821〉(参照 2024-12-15).

2) 斎藤幸成(明治15(1882)年)『武江年表　続編』(上・下巻)(我自刊我書)甫喜山景雄, (国立公文書館デジタルアーカイブ)〈https://www.digital.archives.go.jp/item/1250822〉〈https://www.digital.archives.go.jp/item/4262212〉(参照 2024-12-15).

3) 斎藤月岑(大正1(1912)年)『武江年表　増訂』(朝倉無声増訂)国書刊行会, (国立国会図書館デジタルコレクション)〈https://dl.ndl.go.jp/pid/949631〉(参照 2024-12-15).

4) 斎藤幸成(大正6(1917)年)『江戸叢書　巻の十二』(武江年表：全十二冊 武江年表補正略：三巻)江戸叢書刊行会, (国立国会図書館デジタルコレクション)〈https://dl.ndl.go.jp/pid/1913086〉〈https://dl.ndl.go.jp/pid/952986〉(参照 2024-12-15).

5) 斎藤月岑(昭和43(1968)年)『増訂　武江年表』(上・下巻)(金子光晴校訂)平凡社.

6) 今井金吾校訂(平成15(2003)年)『定本　武江年表』(上・中・下巻)筑摩書房.

7) 国立天文台暦計算室(1994)「日本の暦日データベース」,〈https://eco.mtk.nao.ac.jp/cgi-bin/koyomi/caldb.cgi〉(参照 2024-12-15).

8) 国立国会図書館(2016)「日本の暦」〈https://www.ndl.go.jp/koyomi/index.html〉(参照 2024-12-15).

9) 近世史料研究会編(1994-2006)『江戸町触集成』(第1巻〜第20巻)塙書房.

10) 国立天文台暦計算室(1994)「日月食等データベース」,〈https://eco.mtk.nao.ac.jp/cgi-bin/koyomi/eclipsedb.cgi〉(参照 2024-12-15).

11) 厚生労働省　大臣官房統計情報部(2002)「第１９回　生命表」,〈https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/19th/index.html〉(参照 2024-12-15).